



ウキペディアより引用

令和5年1月15日

### 隆起サンゴ礁の島

八重山博物館、石垣市立図書館に行った後、石垣港 13 時発の八重山観光フェリーの高速船「やいま」で竹富島に向かう。竹富島は観光地だけあって、船は6割方観光客で埋まっていた。この日は大時化だったが、石西礁湖内にある竹富島はサンゴ礁で波浪が弱まるのでまず欠航にはならない。約 15 分で竹富港に着いた。竹富島は新婚旅行で訪れた島で、48 年ぶりの再訪になった。

竹富島は石垣島の南西約 6.5 km に位置する隆起サンゴ礁の島である。地層は琉球石灰岩からなり、その下にチャート層がある。そして島の中央付近にチャート層が顔をだす。石灰岩層は水を通すがチャートは水を通さないためチャート層が露出するあたりに井戸がつけられてきた。このことはNHKの「ブラタモリ」で取り上げられていた。

島の面積は 5.43 km<sup>2</sup>、周囲 12.1 km の楕円形をした平坦な島である。最も高いところで標高は 33m しかない。竹富町には 9 つの有人島があるが、西表島、波照間島、黒島、小浜島に次ぐ 5 番目の大きさである。集落を中心に同心円状に樹林地、農地、保安林、砂浜、イノーが取り囲む。島内の交通機関はミニバスと自転車・バイクである。タクシーはない。あとは集落内を巡る水牛車になる。

竹富島では（一社）竹富島地域自然資産財団が、島の自然環境の保全を目的に入島料として 300 円の寄付を募っているが、どこで支払うのかわからず協力できなかった。座間味島や渡嘉敷島では船のチケット購入時に入島料（100 円）が自動的に徴収されるので、この方法を見習った方がよいのではないかと思う。

港の駐車場には水牛車に乗せる客や、レンタサイクルの客を迎えるバスが並んでいる。私たちは歩くことを基本とし、集落まで連れて行ってもらうべく竹富交通のミニバスに乗っ

た。バスは1回の乗車が300円で、集落内と島の西海岸を巡っている。30分間隔で運転され、電話をかければ付近のバス停まで来てくれる。

港から集落の入口までは1km弱である。「ホーシミチ」というデイゴの並木道を走り、島の中央部にある集落に入った。集落の周囲は環状線（がんにゅ道）が取り囲んでいる。この道路は2000（平成12）年にできた。集落内の車の通行を抑制し、集落の環境保全を目的につくられた。48年前にはなかった道路である。この道路の外側に家はない。

集落の中心にある自転車置き場でバスを降りる。近くには西塘御嶽、まちなみ館があった。



竹富島交通のミニバス（左）、水牛車の乗客を迎えるバス（右）

### 3つの集落

竹富島の集落は、もとは玻座間村と仲筋村からなり、両村は島で最も標高の高いンブフルの丘によって隔てられている。玻座間村は、現在、集落の中央を縦貫する道路を境に西集落（インノタ）と東集落（マイノタ）に分かれる。ンブフルの丘の南が仲筋集落（ナージ）になり、3つの集落で構成されているわけだ。

それぞれの集落に支会長がおり、3つの集落を統合する公民館長がいる。各支会の住民はそれぞれ約100人とほぼ同数である。この竹富公民館には議会が設けられており、高度な自治能力を有している。議員は3支会からそれぞれ2名が選出され合計6名、3支会の顧問、踊り師匠、竹富町議会議員が就く。定例議会は年に6回（初議会、結願敬老議会、種子取議会、支払議会、生年議会、最終議会）あり、それ以外に公民館長が招集する臨時議会が開かれる。議題は主に祭事行事の予算編成、島の諸問題の解決方法などである。竹富公民館執行部は議会での提案権を有しているものの、議会での決議事項を遵守しながら執行している。

なお古い時代には集落は6つに分かれていたらしい。竹富島に渡来した人を中心にそれぞれの集落が形成され、各集落に御嶽と井戸があった。6つの御嶽は、<sup>ウーリキオン</sup>玻座間御嶽（徳之島）、<sup>ナージ</sup>仲筋御嶽（沖繩本島）、<sup>コントウ</sup>幸本御嶽（久米島）、<sup>クマラ</sup>久間原御嶽（沖繩本島）、<sup>ハナツク</sup>花城御嶽（沖繩本島）、<sup>バイヤ</sup>波利若御嶽（徳之島）であり、ムーヤマ（六山）と呼ばれた。なお（ ）内は渡来人の出身地を示す。

竹富町の戦前の人口は1,500人前後で推移していたが、戦後は本土や台湾などの引揚者が急増し、1945（昭和20）年には2,168人に膨れ上がった。狭い島では当然食料が不足するから、島のいたるところが耕地化されたという。しかしこれをピークに人口は減り始め、1960（昭和35）年には843人に落ち込んだ。日本復帰前後から島の土地の買い占めが進み

人口流出に拍車がかかる。1971（昭和 46）年には 304 人と最低を記録した。さらに平成年代に入ってから 2000（平成 12）年までの 12 年間は 200 人台の時代が続く。その後、I ターン者などが加わり、再び 300 人台を回復している。

2020（令和 2）年国勢調査時の人口は 348 人、世帯数は 169 戸であった。なお 2022 年 11 月末時点の住民基本台帳上の人口は 330 人、世帯数は 182 戸である。ちなみに島民の約 1/3 は I ターン者といわれている。

竹富島の集落は 1987（昭和 62）年 4 月に国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されており、木造の赤瓦の民家、白砂の道路、サンゴ石灰岩の石垣が集落を特徴づける。これに先立つ 1986（昭和 61）年 3 月には、「売らない」「汚さない」「乱さない」「壊さない」という 4 つの原則が定められ、伝統文化と自然・文化的景観を観光資源として「生かす」ことを基本的理念とする「竹富島憲章」が制定されている。

この保存地区の指定を受けている場所が沖縄県にもう一つある。沖縄本島の西に浮かぶ渡名喜島である。赤瓦の木造民家、サンゴ石の石垣は共通するが、これに加えて屋敷林として植えられたフクギが特徴的であった。しかし竹富島はこのフクギが少ない。おそらく竹富島でもフクギが数多く植えられていたと思われるが、本土復帰後に失業対策事業として行われた道路の拡幅で伐採されてしまったのではないだろうか。



白砂の道路とサンゴ石の石垣（左）、赤瓦の屋根とシーサー（右）

## 水牛車

竹富島の公民館である「まちなみ館」の前は広場になっていて、6 台の水牛車が待機し、裏の方で水牛が寝そべっていた。島には水牛車観光の会社が 2 社ある。新田観光と竹富観光センターだ。

「まちなみ館」前は竹富観光センターの水牛乗り場になる。同社は水牛車の他にレンタサイクル、グラスボート、飲食店を兼業している。水牛車観光は水牛が牽く車に乗り、集落内をのそりのそりと回る。車上のガイドは三線を弾きながら島唄を歌い、町並みを解説する。こちらの所要時間は約 25 分である。

誰もいない広場では水牛車の上でガイドの 1 人とおぼしき人物が三味の練習をしていた。

もう一方の新田観光の乗り場は集落の北西部にある。この水牛車観光は 1976（昭和 51）年に民宿新田荘の新田長文氏によって始められたといわれており、こちらが本家になるよ

うだ。48年前に来た時に水牛車なるものを見た記憶はないが、その後すぐに始まったことになる。

両社の水牛観光のルートは異なる。観光センターは島の東側を回るのに対し、新田観光は西側を回る。所要時間は新田観光の方が長く30分だが、料金は前者が1人2,500円、後者が2,000円となっている。

同じ竹富町内の由布島でも海を渡る水牛車が有名だが、沖縄における水牛の歴史はそれほど古いものではない。戦前の1933～38年にかけて台湾から石垣島に60頭ほどが導入されたのが始まりとされ、1970年ごろには1,400頭ほどに増えたようだが、その後は頭打ちになり、以後減少しつづけてきた。

県立横浜翠嵐高校の同級生で、石垣島で米作りをしていた干川明君は石垣島に来た当初、水牛で田を起こしていた。深い田では水牛が有効な働き手であったが、その後、機械化が進むと機械に取って代われ、水牛は観光目的の用途に限られるようになったのである。彼には今回の島旅の最終日に石垣島のホテルで会った。

ちなみに水牛は牛とは別種である。水牛は結構気性が荒いらしく、観光用の水牛には大きな鼻輪がつけられているが、これを外すと扱いが大変なほど暴れるらしい。



まちなみ館前の広場に並ぶ竹富観光センターの水牛車（左）、集落内を回る水牛車（右）

## 旧与那国家住宅

観光センターの広場から集落内の道を東に進むと旧与那国家住宅が保存されている。竹富島の伝統的な屋敷形態を色濃く残す典型的な住宅で、2007（平成15）年12月に国の重要文化財に指定されている。

2003（平成11）年から島の大工を中心に古い家を修繕・整備し、2006（平成14）年3月に落成した。

屋敷の周囲はサンゴ石の石垣に囲まれ、防風用のフクギが植えられた典型的な沖縄の住宅である。入口にはヒンプンと呼ばれる石灰岩でつくられた目隠しの衝立があり、背後に主家（フーヤ）が建つ。主家の隣が炊事棟（トーラ）、家の後ろには豚小屋（オーシ）がある。豚は各家で飼われていた。この他に薪小屋や物置小屋もあったようだが、この2棟は再現されていない。主家の部屋は一番屋、二番屋、三番屋に分かれ、裏側が裏座と呼ばれる寝室になっている。一番屋は賓客を迎えるいわば応接間、二番屋は仏間、三番屋は日常生活を営む場とされている。屋根は赤瓦、東石にはサンゴ石が使われていた。

琉球王朝時代は身分制による建築制限令があり、竹富島は当時の身分制では全島民が百姓の身分で、屋敷の広さは15尋角、主屋は4間と3間、炊事棟は3間と2間の掘立て柱の茅葺きで、檜木、榎などを用材とすることは禁止され、厳しく制限されていたという。

主屋は1913（大正2）年の建築である。岡本太郎が1959（昭和34）年に竹富島の集落を撮影した写真には茅葺き屋根の家が半分以上残っている。一方、トタンの家は皆無であった。竹富島の住宅はもともと茅葺きであったが、次第に赤瓦に変わっていった。そして観光地として注目されるようになると、赤瓦に統一すべきとの意識が強くなり、ほとんどの家が赤瓦に変わっていくのである。したがってこの住宅も元は茅葺きであり、建設当時の状態を忠実に再現したものではない。もっとも今日、茅葺きを再現することは材料や労力の確保、さらには技術の面で不可能であろう。

近くに酒造所跡と書かれた石碑が建っていた。竹富島でもかつて泡盛がつくられていたのだろう。



旧与那国家住宅（左）、同住宅の仏間のある二番屋（右）

### 竹富小中学校

旧与那国家住宅の西側に町立竹富小中学校がある。

小学校は1892（明治25）年6月に大川尋常小学校竹富分教場として設立され、今年で130周年を迎えている。

現在は小学生27人、中学生7人が在籍している。人口300人強の島で、児童生徒合わせて34人もいる島は際立って珍しい。これはIターン者が島の人口の1/3を占め、しかも若い人が多いためだろう。ちなみに竹富島の平均年齢は49.6歳であり、高齢化率は33%であった。その一方で在来島民に100歳以上が3人もいる。つまり人口の約1%が100歳以上である。蛇足だが全国の100歳以上の人口比は現在0.09%ほどなので、竹富島は異常に元気な高齢者が多いということになる。

校門の前には花壇や鉢に花が植えられ、心が和む。校門の裏には文部大臣奨励省や国立科学博物館長賞などこれまでに受賞したことを示す数々のプレートが貼られていた。校舎は赤瓦の2階建てで、壁面には民族衣装を身に着けた島民の絵が描かれている。校舎の前に広々とした校庭があり、芝生が敷き詰められ、ランニングコースも整っている。校舎の反対側には体育館もあり、なかなか素敵な教育環境にあるようだ。



町立竹富小中学校の校門（左）、同小中学校の校舎（右）

### 中筋井戸

旧与那国家住宅から南下し、十字路に架かると、大きなガジュマルの木があり、その下に仲筋井戸があった。1976（昭和 51）年に石垣島から海底送水管が敷設されるまで、この井戸の水が仲筋集落の住民の飲料水として使われていた。その近くに「水道記念碑」も置かれていた。

この井戸の南側は一段と高くなっており「ンブフルの丘」と呼ばれている。島で一番高い場所になる。この丘は石灰岩層の下にあるチャート層が突き出た場所に相当する。

「ンブフルの丘」とは聞きなれない名前だが、近くに立っていた看板には、「昔、仲筋村の住民が飼っていた牛が夜中に飛び出し、角で土や石を突き上げて一夜のうちに丘をつくり、その上でンブフル、ンブフルと鳴いていました。（中略）その牛の鳴き声にちなんでンブフルとしたと伝えられています」と書かれていた。現実にはそんなことはありません作り話で、もともと地殻活動によって造り出されたものである。

島の上層を覆う石灰岩は水を通すため島に降った雨は石灰岩層を浸透し、海に流出する。雨が少なければ海からの海水の圧力が高まるから海水が浸透し、井戸を掘っても海水が混ざることになり、飲料水としては不適だ。石垣島から突き出た古生層（チャート層）が島の北端から中央部にかけて伸びている。このチャート層は水を通さない不透水層なので雨水は地下に押しとどめられる。チャート層に貯められた地下水は淡水のため井戸水は飲むことができる。つまりンブフルの丘のチャート層に貯められた水は井戸水として優れていたわけである。このように飲料水として適した井戸は島の中心部を中心に 26 ヶ所にあったといわれている。

この丘には「人頭税廃止百年記念之碑」が建っていた。2003（平成 13）年に八重山人頭税廃止百年記念事業期成会が建立したものである。

1609（慶長 14）年の島津の琉球侵攻後、1611（慶長 16）年に検地が行われ、1637 年から人頭税が施行された。米が穫れない竹富島では、税は穀物と布で代替された。島全体の税が決められ、それを人口で頭割りした人頭税が決められたのである。島の人々は過重の納入義務に加え、人頭税のシステムによって住居を自由に移動することさえできなかった。

1903（明治 36）年 1 月 1 日をもって島民を苦しめた人頭税が廃止され、新税法が適用された。この石碑は人頭税から解放された島民の喜びを示したものであろう。



中筋井戸（左）、水道記念碑（右）

## 中筋集落

ンブフルの丘から南下すると中筋の集落になる。50～60mほど人家が途絶えたが、やがて家が現れた。

サンゴ石を積み上げた高さ1.5mほどの石垣が連なる白砂の道を歩く。土もない石垣の上には今まで見たことのないような植物がいくつも生えていた。帰ってから調べるとキンチョウ（金蝶）というマダガスカル原産の帰化植物のようだ。多肉植物の多年草で高さ1m前後に成長するらしい。

集落内の住宅は旧与那国家住宅と同様、入口の前にはヒンプンが設けられている。竹富島ではこのヒンプンをマイヤシと呼ぶ。集落内の家のどこも人が住んでおり、空き家はない。

右手に六山の一つである幸本御嶽への入口にあたる石の鳥居が現れた。森の奥が御嶽なのだが、立ち入りが禁止されていたので、これ以上進むのは諦める。

幸本屋前というバス停の十字路の角に「ちろりん村」という小綺麗なカフェがあった。夜はバーになるようだ。この店の前に「<sup>たいたん</sup>泰鍛窯」という焼き物屋があり、中を覗くと、ご主人が出てきたので少し話を聞く。

ご主人は埼玉県出身で、沖縄に来る前は横浜の綱島に住んでいた。最初は西表島に移住し、その後、竹富島にやって来たIターン者である。灯油炉で陶器製の小鉢や茶碗などの小物を作って販売している。Iターン者だが竹富島のことには詳しく、竹富島の自治組織やクルマエビ養殖場のことなどを聞く。

集落のはずれの道路脇に根元をサンゴ石で固めたガジュマルの木が生えていた。石垣仲筋会が創立50周年を記念して2015（平成27）年1月に植えたものだ。植樹から8年が経っているが、けっこう大きくなっていた。

石垣仲筋会は、石垣島に住む仲筋集落の出身者で組織する親睦会である。この会が発足したのは1965（昭和40）年のことだから、復帰前の人口流出が激しい時代に島を致し方なく離れた人達の望郷の念がこのガジュマルの木には込められているようだ。

ガジュマルの木の先から環状線に入る。環状線の外側は樹林帯が形成され、内側は集落である。環状線の脇には沖縄の特徴的な亀甲墓が2区画に分かれて7～8基ほど並んでいた。仲筋集落の先祖の墓かもしれない。その先には1頭の水牛が木につながれてしゃがみこんでいた。のんびりとした光景である。



中筋集落の景観（左）、カフェ「ちろりん村」（右）

### なごみの塔

環状線を北上して西集落に入った。若い人たちは自転車を借り、白いサンゴ砂の道路を走っていく。本土ではこの時期花をみることができないが、ブーゲンビリアやハイビスカス、そのほか名前のわからない色とりどりの花が咲き誇る。

西集落のはずれの東集落に近い場所に赤山丘という公園があり、その丘に「なごみの塔」が立つ。平家の落武者の赤山某という者が流れついて住み着いたという伝説に由来する。

戦後、人口の増加に伴い、島民に情報を周知するための放送施設が集落ごとにつくられたが、西集落の放送施設は木造であったため老朽化が目立っていた。西地区では一和会という住民の組織が赤山丘の150坪余の土地を取得し、西支会に寄付し、公園にすることが決まった。支会のメンバーは建設材料を集め、労力を提供して、この赤山丘を整備したようだ。

そしてこの丘の上に高さ4.5mの放送台を作ったわけだが、これを「なごみの塔」と名付けた。もともと放送台であったが、この塔からは竹富島の集落全体を眺望できることから、今では展望台になっている。ただし、なごみの塔は修理工事中で登ることができなかった。仕方なしに塔の付け根の赤山丘まで登り、集落を眺め、写真を撮った。



なごみの塔と赤山丘（左）、赤山丘から赤瓦の集落を望む（右）

サンゴ石の石垣で囲まれた赤瓦の家々が連なり、まさに心和む景観だ。このように竹富島に比較的古い集落が残されているのは、「竹富町史」によると、上述した身分制による建築制限令（区画がほぼ均一）に加えて、①戦争の被害を受けなかったこと、②過疎化で家の改造が進まなかったこと、③風土に根差した集落景観美を指摘されたこと、④それを島民が受



け入れ、保存運動を継続したこと、⑤重要伝統的建造物群保存地区に選定され建築マニュアルが施行されたこと、⑥観光と結びついて人口が増大、緩やかに活性化していること、などが指摘されている。

### 世持御嶽と種子取祭

赤山丘から西と東の集落を分ける道を北上したところに「たけとみ民芸館」がある。村が建物を建て、竹富町織物事業協同組合が指定管理者になっている。

竹富島の伝統的な織物であるミンサー織や八重山上布などの作業工程が見学できるとともに、伝統的な染色技術を継承する後継者育成の施設である。あいにくコロナ禍にあり、一般の人の見学は中止されていたため、中に入ることができなかった。

この民芸館の北側に広場があり、世持御嶽が置かれている。この場所は、琉球王府時代は村番所、竹富村誕生の1914（大正3）年から1938（昭和13）年までの間は竹富村役場が置かれていた。つまり竹富町の行政の中心地だったのである。その後、町役場は町外の石垣島に移った。

この広場は竹富島の最大の行事である種子取祭の会場になる。世持御嶽の前には鉄パイプが組まれていたが、恐らく祭りの時に使われるものをそのまま残しているに違いない。この世持御嶽と並んで玻座間御嶽があり、竹富島は御嶽だけである。

種子取祭りは、蒔いた種が無事に育つことを祈願する祭りで、毎年旧暦の9～10月にかけて10日間にわたって行われる。約600年の伝統を有する祭りといわれており、1977（昭和52）年に国の重要無形民俗文化財に指定されている。なお種子取祭りはもともと上述した六山がそれぞれ異なる日に行っていたが、ある時から統一されて一緒の日に行われるようになったとされる。



種子取祭が開催される世持御嶽（左）、玻左間御嶽（右）

祭りの圧巻は7日目と8日目に行われる奉納芸能だ。奉納芸能は舞踊と狂言に分かれ、前者は女性が、後者は男性が演じる。約70点を超える芸能が披露される。7日目は玻座間村（西集落と東集落）、8日目は仲筋村（仲筋集落）が受け持ち、競演するらしい。ちなみに奉納芸能は竹富島で生まれたものと、八重山の島々から取り入れたもの、さらには沖縄本島や本土から入って来たものなど、様々な種類があるという。この祭りには島を離れた人々も里帰りして参加し、大勢の人で島は祭り一色になるそうだ。ただ、2020年と2021年の種子取祭りは新型コロナのため中止され、2022年は一般客を除く関係者のみで行われている。

## 火番盛

世持御嶽の裏手（北側）に小城盛と呼ぶ火番盛の跡がある。

鎖国体制下の 1644（正保元）年に薩摩藩の支配下にあった琉球王府が海上を通行する船舶を監視し、狼煙を上げてその情報を石垣島の蔵元に通報した遠見番所である。狼煙を上げるために火を燃したことから火番盛といわれた。

この火番盛は八重山諸島に 10 ヶ所設置され、島伝いに情報を伝達、竹富島は役所が置かれていた石垣島とをつなぐ役割を担っていた。

この火番盛は石灰岩を積み上げてつくられたものだったが、近年、この石積みに歪みやズレなどが目立つようになり、崩壊の危険が出てきたため、2022 年度に危険な部分を解体し、2023 年度に積みなおす工事が行われていた。したがって、柵が設けられ、火番盛の跡に登ることができない。しかし柵は簡単に越えられたので、ここは自己責任で石段を登った。しかし樹木が邪魔して海は僅かに見えただけだった。

この火番盛の近くに竹富町出身戦没者の「慰霊之塔」が建っていた。石碑には「ここはもや 汝が古里ぞ 帰りきし みたま安かれ この島とともに」と刻まれ、341 名の戦没者氏名が書かれていた。島別の戦没者は波照間島の島民が最も多く、これに竹富島が続く。



修理のための解体工事が進む小城盛（左）、小城盛からの眺め（右）

西集落と東集落を隔てる中央道路を横切り、東集落に入る。

立派なサンゴ石のヒンプンを積んだ家の前でおじいさんに会い、立ち話をする。87 歳になるといっていたが見た目はそれよりも若く、背筋を伸ばして散歩していた。若いころは横浜でタクシーの運転手をしていたが、その後、沖縄本島、石垣島で働き、竹富島に U ターンした。島ではミニバスを運行する竹富交通で働き、今は悠々自適の老後を過ごしている。

碁盤の目のような集落を散策する。サンゴ石の塀がつらなり、美しい集落景観を形成している。司馬遼太郎もこの美しさに感激し、「街道をゆく」の中で次のように書いている。

「集落はじつに美しい。本土の中世の村落のように区画され、村内の道路はサンゴ礁の砂でできているために品のいい白味を帯び、その白さの上に灰色斑ともいべきサンゴの石垣がつづき、その全体として白と灰色の地の上に、酸化鉄のような色の琉球瓦の家が夢のように並んでいるのである。」

集落の中心部あたりに「あいのた会館」と呼ぶ東集落の集会所があった。

48 年前に来た時は泊まった高那旅館も健在であった。島で最も古い旅館で、我々が泊まる 1 年前の 1974 年 4 月に司馬遼太郎も泊まった宿である。

## 西塘御嶽

「島守りの神・西塘様」と書かれた石碑が建っていた。石碑によると、この御嶽は西塘様を祀っているという。

西塘は、1500（明応9）年のオヤケアカハチ事件で、王府の武将であった征討軍大里親方一行が竹富島巡回した際に、その聡明さを見込まれて王府軍と共に首里に上り法司官に仕えた人物である。苦節25年の忠勤と数々の功績がかわれ、1524（大永4）年に八重山初代の頭職・竹富大首里大屋子に任命されて竹富島に戻り、八重山全体の統括者になった。竹富島のいわば出世頭だった。

彼は、蔵元が1543年に石垣島に移った6年後に石垣島で亡くなっている。享年65歳であった。その後、竹富島に墓を改葬したが、その場所が現在、西塘御嶽となっている。

この西塘御嶽の前が「まちなみ館」である。竹富島の中核をなす公民館で、島内外との交流やコミュニティ支援の役割を果たしており、2000（平成12）年に完成した。

町立竹富保育所を経て、西集落の「安里屋クヤマ」（1722～1799年）の生家に行く。民謡「安里屋ユンタ」により広く知ら、美人の誉高かった女性が住んでいた家だという。ただ、ちょうど家屋を改修中で中に入れなかった。



西塘御嶽（左）、まちなみ館（右）

## 観光の島

新婚旅行で来た1975年当時、竹富島の町並みや景観はすでにそれなりに注目されていた。しかし、まだ観光客は少なかった。ここで、竹富島の産業の歴史を振り返っておこう。

沖縄県が本土復帰（1972年）する前の竹富島は農業の島だった。1963（昭和38）年当時、竹富島の総戸数146戸のうち農家は116戸を占めた。島内で麦、粟や稗などの雑穀、芋や豆を作り、米は水の豊富な西表島に作りこめて運んでいた。唯一の換金作物がサトウキビで、石垣島の製糖工場に搬入していた。しかし砂糖の自由化でサトウキビ栽培は終焉を迎える。水産業はあまり発達せず、イノーでの自給的な漁業にとどまっていた。明治期にカツオ漁業が行われたこともあったが、その後、倒産している。

本土復帰後、農業は衰退し、竹富島は観光の島に変わった。島の景観や自然を守り、この地域資源を観光業にうまく活用したのである。その後、島を訪れる観光客は鰻登りに増えた。コロナ禍前の2018年には年間約50万人が訪れている。竹富町全体の観光客数は約100万人であったから、約半分に相当する。ちなみに竹富島に続くのが西表島の約30万人だった。

ただコロナ禍では約半分に落ち込んでいる。幸い、昨年の夏以降、新型コロナの脅威が収まるにしたがって観光客は回復基調にある。島には宿泊施設が14軒、飲食店が10軒ある。

現在の観光業以外の産業は、島の南部で営まれているクルマエビ養殖と畜産業である。

クルマエビ養殖は本土資本に買収された土地を買い戻し、1次産業の復活をめざして上勢頭保（現南沖縄国際海運社長）が1989年に始めたものだった。陸上を掘り込んだ池が養殖場でその面積は7haに及ぶ。ただ経営的には赤字が続いたため、2015（平成23）年に株ユーグレナに8,450万円で売却し、現在はユーグレナの子会社になっている。

牛飼いの農家は10戸程度である。島の南部全体が牧場になっていて、子牛を繁殖している。出荷数量は月に5頭程度だという。毎月13日に石垣島で子牛のセリが行われるので、フェリーで出荷している。平均販売価格を60万円とすると、年間の販売収入は3,600万円と推定される。島の南部への立ち入りは許可が必要なため、残念ながら行けなかった。

### 星砂の浜と蔵元跡

集落からミニバスに乗って島の南西部にあるカイジの浜に行った。

この浜は「星砂の浜」とも呼ばれ、有孔虫の遺骸が砂浜を形成している。浜の入口では若い男性が観光客相手にこの星砂を小さな瓶に詰めて売っていた。孫の土産に1本買った。海岸沿いにはハスノハギリと呼ばれる比較的大きな樹木が海岸植生をつくっている。

バス停の近くに蔵元跡がある。蔵元とは本来、「年貢を収納する蔵」のことだが、それが役所を意味するようになった。西塘が八重山諸島全体を統治していたときは琉球王朝の行政の中心は竹富島に置かれており、この場所に蔵元があったというわけだ。西塘は20年間、ここで政を執った後、蔵元は石垣島に移っている。

跡地の周囲に低い石垣が積み、石碑が建っているが、解説板がなければ、なんの変哲もない場所である。

20分ほどこの場所に滞在し、バスが来るのを待つ。バスには誰も乗っていなかった。バスは海岸沿いの道を走り、コンドイ浜に寄った。ここで女性1人が乗る。そのまま集落に戻り、客をたくさん乗せて、竹富港に向かう。17時30分の高速船で石垣港に戻った。



星砂の浜（左）、蔵元跡の石碑と石垣（右）

#### 【文献】

竹富町史編集委員会（2011）竹富町史第二巻竹富島，竹富島役場．pp. 698.

司馬遼太郎（2008）街道をゆく6沖縄・先島への道．朝日文庫，朝日新聞社．pp. 236.